

元気あおもり応援隊会議（大阪圏）

「元気あおもり応援隊会議（大阪圏）」を令和4年8月29日（月）午後5時45分から大阪第一ホテル（大阪府大阪市）で開催しました。

当日は、13名の応援隊の方々が参加し、会議では「『選ばれる青森』への挑戦～コロナを乗り越え、世界の宝 縄文と共に未来へ～」をテーマに意見交換を行いました。

その概要は次のとおりです。

（青森県知事 三村申吾(以下知事)）



お久しぶりです。

本当にリアルにお会いできるのが一番の贅沢で嬉しいことだと、そう思います。

一言、御挨拶申し上げます。

本日、皆様方におかれましては、大変お忙しい中、元気あおもり応援隊会議に御出席を賜り、誠にありがとうございます。

また、皆様方には、それぞれのお立場から様々な場面におきまして、私共、青森の元気づくりに対しましての御支援をいただいております。厚く御礼申し上げます。

さて、私共青森県では、これまで暮らしやすさのトップランナーを目指そうという「生活創造社会」の実現に向けまして、「世界へ打って出る」視点も取り入れながら、「攻めの農林水産業」の展開をはじめ、「経済を回す」という取組を特に重点的に進めてきました。その結果、農業産出額や農林水産品の輸出額は堅調に伸び、外国人延べ宿泊者数や創業・起業件数も増加いたしましたほか、令和2年3月のフジドリームエアラインズの青森・神戸線就航をはじめといたしまして、航空路線も充実するなど、様々な分野におきまして、取組の成果が着実に現れてきたところでありますが、一方で、長期化いたします新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、青森県におきましても、依然として幅広い分野に大きな影響を及ぼしております。

このため、県では、感染拡大防止や保健・医療提供体制の整備に、引き続きしっかりと取り組みますとともに、社会経済環境の変化にも的確に対応しながら、地域経済の早期回復とコロナの先を見据えました事業展開の推進を図るため、県産品の消費拡大や販売促進、観光需要の喚起など、「経済を回す」取組の再起動や各産業分野におけるICT化の促進など、デジタル化の推進にも積極的に取り組んでいるところであります。

また、去る7月27日には、三内丸山遺跡をはじめといたします「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録され、一周年を迎えまして、さらに、来年12月には、白神山地が世界自然遺産登録30周年を迎えるところであります。

今後も、関係自治体と連携をしながら、青森県が有しますかけがえのないこの2つの世界遺産をしっかりと守り、次の世代に引き継いでいくとともに、その価値や魅力を国内外に積極的に発

信しながら、青森県を訪れる方々に一層の感動を与えることができるよう、活力と魅力あふれる地域づくりに向けて取り組んでいきたいと思っております。

何卒、応援隊の皆様方の御支援、御協力を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。

本日は、『『選ばれる青森』への挑戦～コロナを乗り越え、世界の宝 縄文と共に未来へ～』のテーマのもと、国内外から「選ばれる青森県」を目指す本県の様々な取組につきまして御説明をさせていただきますので、皆様方には、忌憚のない御意見、御提案を賜りますようお願い申し上げますとともに、私共青森県のイメージアップや情報発信につきましても、一層のお力添えを重ねてお願い申し上げます、御挨拶とさせていただきます。

本日は、本当にありがとうございます。

(山口義久氏)

私は、縄文のことについて申し上げます。

北東北、それから北海道の縄文遺跡群が世界遺産になったということは、観光のために非常に良いことだというのは勿論のことではありますが、それだけで留めさせるのはもったいないと感じております。縄文時代については、青森県内の遺跡だけを見ても、大平山元遺跡から数えて1万年以上の年数があるわけです。それだけの長い間、縄文文化が続いたということは、それなりの理由があるわけで、そのところも、多分、世界遺産になった理由の1つだろうと思います。



その意義というものを青森県から発信するというのが、やはり重要なことであるし、また、青森県の務めでもあるというように考える次第です。

そうすると、いろんな問題がそこに関わってくると思います。

1つは、歴史の問題で、よくアイヌが先住民族だと言われるわけですが、北海道でも、縄文遺跡は古くからありますが、アイヌの遺跡は、千年足らず前からということでもありますので、どう考えても先住民族という言い方はおかしいと思われまます。

ただ、それに表だって異を唱えると、いろいろ問題があるかも知れませんが、縄文時代の意義を明らかにすることによって、その辺の誤解みたいなものも解かれ、日本の歴史に対する理解も深まるのではないかと考えております。

それから、縄文時代の意義というのは、この頃、よく言われる持続可能ということをもっとまに体現したことであり、昨今のSDGsという言葉に違和感を覚えます。サステイナブル・デベロップメントっていうのはよいのですが、ゴールズという目標が沢山あります。本来は持続可能な開発が目的であって、そのための手段が沢山あるわけですが、ゴールズという言葉から、そこをやればいいんだというふうに捉えられてしまいますと、手段の目的化になって、目的を達成するために良いことではないわけです。

その辺のことを考えて、縄文の発想を持続可能な社会の建設のためにも生かしていただきたいと考えています。

昨今、再生可能エネルギーの話が出ていますが、そのために森林を伐採するのはもったいのほか

で、本末転倒だと思います。

持続可能な社会の本来の考え方に立ち戻って、青森県の施策も進めていただきたいと切に願っております。

(知事)

ありがとうございます。

まず、私の方から想いというか、話をさせていただきます。

なんと言いましても、縄文遺跡群の価値は自然との共生、しかも、採集・漁労・狩猟を主体としながら定住ができるぐらい自然の恵みをうまく利用しながら暮らし、1万年以上という長い期間にわたって、平和な、争いが無いという、そういう状況であつただろうということが、価値だと思っています。

勿論、自然環境が厳しく、医療等も発達していない時代ですから、生きることが大変だったとしても、この支え合う、平和で争いのない自然と共生した1万年、この価値をしっかりとアピールしていかなければいけないと思います。

私共の企画政策部と三内丸山遺跡センターからも副所長が来てくれていますので、それぞれお話をさせていただきます。

お願いします。

(企画政策部長)

ただ今、先生からお話があつたとおり、この縄文時代というのは、平和で協調的な社会が1年以上続いてきたわけです。

それは、先ほど、先生がおっしゃいました持続可能な社会の建設にも繋がっていくというふうに感じております。そのため、県では、現在、4年目に入っておりますが、基本計画の「選ばれる青森への挑戦」にもそういった考え方を取り入れまして、それを基にこの縄文遺跡群の顕著で普遍的な価値を守って、次の世代に継承していくことを確実に果たしていきたいと考えております。

保存と活用というところについて、観光だけでなく、そういった理念なり、意義というものをきちんと教育の場でもしっかりと継承していきたいと思っております。

どうぞよろしく願いいたします。

(三内丸山遺跡センター副所長)

それでは、縄文遺跡群の保存・活用について補足させていただきます。

世界遺産に登録されたということは、まさしく人類共通の宝であると、世界的に認められたということでございます。

この縄文遺跡群を私たちは次世代に守り伝え、その価値を伝えていくということが大事だと思っております。そのためにその価値を学んで、魅力を発見・体感できる講座、いわゆる出前講座を実施して、小学生から社会人まで、そのような価値を伝えるような講座を実施しております。

また、今年の秋には福岡、来年度は関西圏におきまして、三内丸山遺跡で実際に出土したもの

を展示するようなプロモーションを実施したいと考えています。また、来年1月には、東京におきまして、4道県共同によるフォーラムも開催するなど、国内における縄文遺跡群の価値の浸透を図っているところでございました。

この他に国外への情報発信といたしまして、4道県共同によるホームページやリーフレット等において、英語等の多言語化しているほか、本年の9月には、英国・ストーンヘンジビジターセンターで開催されます「ストーンヘンジと先史時代の日本」展に三内丸山遺跡の出土品が展示されるということになっております。来年の秋までの展示ですが、これを好機と捉えまして、縄文遺跡群の価値や魅力の発信に努めていきたいと考えております。

(知事)

実は、青森の小中学校で、この縄文の講座と申しますか、子どもたちにお話しているところで

す。これまでも、色々なところでりんごの授業はやっていましたが、今度九州の方で、縄文時代というのはどういう時代で、どういう出土品があってといったことを、青森県には出土品も沢山ありますので、実際に出土品に触ってもらったりしながら知っていただいて、そういった、この日本の国にその時代を生きた人たちの想いというものを伝えられるように頑張りたいと思っておりました。

(山田武弘氏)



今日は、応援隊会議を開催していただき、また、発言の機会を与えていただきましてありがとうございます。

三内丸山をはじめとする縄文遺跡群についてですが、私も三内丸山と、それから是川には何回か行きました。

ただ、青森県の他の遺跡には行っていませんし、北海道や他県にも行けていません。機会があれば行ってみたいですし、縄文遺跡を巡るツアーがあれば、是非参加したいと思っております。

また、自然遺産の白神山地の方は、2回山頂まで登ってきまして、麓の方の暗門の滝やら、マザーツリーやら、青池も何回か見たことがあります。

青森県には、そういう世界文化遺産、それから自然遺産、その他にも素晴らしい自然が沢山あります。しかし、首都圏は伝わっているかもしれませんが、残念なことに関西圏には、なかなか距離的なこともあって伝わりにくいのかなという気もいたします。

なかなか、それを伝えるというのは、難しいことではありますけども、関西でも、いろいろ企画をされておられるようなので、そういったことを繰り返し、繰り返しすることによって、じわじわと段々と伝わってくるのかなというふうに思っております。

一度そういうことを理解してもらえれば、自然にしても、そういった歴史にしても、食生活にしても、青森県は十分に素晴らしさを持っていると思いますので、そういう青森ファンといえますか、増やしていくことは可能かなと思います。

この前、旅行会社のパンフレットを見ていましたら、青森県の団体旅行促進助成制度というの

があり、その助成を受けて、青森県だけを巡るツアーがありました。今までですと、竜飛岬と下北と秋田の男鹿半島、そういう組み合わせの旅行が多かったと思われませんが、県内だけ3日間回るというツアーはあまり目にしていませんでした。

そういった助成制度をやれば、それなりにお金はかかるわけですが、いずれまた返ってくるのかなと思ひまして、非常に良い制度ではないかと受け止めました。

見たのは、今のところ1社だけで、他の社などもあるのかなと思ひましたが、まだありませんでした。いろいろ、旅行社にお話して、組み込んでいただければいいんじゃないかなというふうに思っております。

それから、個人的な趣味を申しますと、旅行が趣味でして、今年も青森のねぶたを観てきました。

(知事)

ありがとうございます、3年ぶりです。

(山田武弘氏)

秋田の竿灯と、東北4大祭り、全部観てきました。

2年前には、私のところの山の会が20周年ということで、八甲田山に十数人で登ってきまして、麓でまたドンチャン騒ぎをしたり、そういうことをやって、2年後にまた、今度は25周年になりますから、また八甲田山に登りたいと考えています。もう、岩木山も登っています。

旅行が趣味なものですから、しょっちゅう行っております。

今年は、福島に復興をとということで、もう5、6回行っていますけども、また行ってみたいかなと思っております。

青森に行きますと、私は必ず八戸の陸奥湊市場に行きまして、朝は6時に行って刺身を買ってビールを飲んで腹いっぱい食べております。ああいうことができるところが、何か関西に欲しいかなと思うんですけど、距離的、また衛生上の問題もあって難しいかなと思ひますが、個人的な希望として申し上げておきます。

(知事)

いろいろと御提言いただいたんですが、やはり、縄文遺跡と自然遺産の白神山地、2つ持っているというのは、非常に強い武器になると考えておひまして、アフターコロナとかウィズコロナとかいろいろ言っていますが、要するに行動制限がとれた中において、それから、また、海外からのお客様も戻ることが可能になりそうな雰囲気になってきておりますので、この2つを最大限活用していきたいと思ひておひました。その辺について、少し説明させていただきます。

今年は3年ぶりにねぶた祭りが開催されました。東奥日報さんで花火大会もやってくれました。8月2、3、4日は少しおとなしい感じでしたが、5日ぐらいからはもう、皆もう、ムワーツと噴火したといひますか、凄ひ状態で一生懸命跳ねてストレス発散して、7日の日、海上運行でも盛り上がりました。久しぶりで、もう、どうだ！っていう感じで、スッキリしました。

やはり祭りは青森にとって大事なことだなと感じました。

コロナと闘ひながらということで、八戸は神輿渡御などの行列は出来ませんでした、立佞武

多等は運行もできました。

それと、陸奥湊の話がございましたが、ついに改修再開となりました。

陸奥湊のように、J Aや日本航空さんが、生の獲れたてのものを持ってきて、スーパーの KOHYO さんで販売するとか。市場的にはできないんですけど、そういう新しい仕組み等々始まっています。それぞれ担当の方から説明させます。

(観光国際戦略局次長)

山田様、ありがとうございます。

まず、三内丸山遺跡をはじめとした縄文遺跡群が世界遺産になったこと、あと、白神山地が世界遺産になってから来年いよいよ30周年になろうとしています。

この2つの世界遺産を巡るようなツーリズムを、現在、推進してございまして、青森県が持っている2つの持続可能な社会の実現に、何かこう、非常にマッチするものを観てもらう、そういったツーリズムを目指して、様々なところで、現在、取組を進めています。旅行会社さんにも、そういったものを沢山作ってもらおうよう、現在、お願いしているところです。

また、バスの助成制度を活用した青森県だけを巡る旅のお話、ありがとうございます。今、団体バスがやはり困ってございまして、今回、6月の補正で、青森県内のバスをお使いになっていただく、旅行会社さんに少しバス代を支援する仕組みを作りました。1日バス、おいくらみたいなことで、それを何度も使っても構わないということで、そのバスは青森に泊らないともらえない仕組みになってございまして、地元のバスと地元お宿を何日もかけて巡っていただくような、そういった旅行が漸く関西の方にもできたということ、私も伺っていたので、今、実際、見られたというお話を伺ったので、非常に嬉しく思っております。

こういった、まだ、立ち上がり、少し潤滑油が必要な時期にこういった取組をしているんですが、これを契機に少し青森のことを深く知っていただける機会も作れたのかなというふうに思っておりまして、ますますこの取組、これからはセールスを続けていきたいと思っております。

また、最後なんですけども、ツアーのお話をされておりました。県内の縄文遺跡を巡るツアーがあればということで、こちらの方もまだまだ縄文遺跡群、全国の中でも認知度がまだまだ足りなくおられます。今、旅行会社さんに理解していただきながら、いかに初めてのお客様に馴染んでいただけるか。そういったことを少しずつさせてもらっておりまして、現在、クラブツーリズムさんという大手の旅行会社さんの方が精力的に、1つだけじゃなく、今までは三内丸山遺跡だけだったんですが、もう1つ、プラス1、プラス2みたいなことで周遊できるような仕組みのものを徐々に作っていただけるようになってございまして、そちらの方も遺跡を巡るツアーがあれば、是非ご参加したいという御希望があるというふうにも伺ったので、こういったものを沢山、いろんなところで沢山作れるように、これからは頑張って参りたいと思っております。ありがとうございます。

(知事)

関西・中京・九州誘客対策事業という枠で、やっています。

生ものも是非、召し上がっていただきたいです。

(農林水産部長)

まず、お中元やお歳暮で県産品を御愛用いただきありがとうございます。

身近なところでは、アンテナショップ「ええもんショップ」をやっております。旬の時期になりますと、りんごですとか、嶽きみですとか、そういったものも取り扱っています。

ただ、やはり、生ものというのは、非常にハードルが高く、先ほど、知事からもありましたように、近畿圏の KOHYO さんという中堅スーパーがございますが、そちらで、青森県漁連と青森フェア等につながりがあったんです。そこに、ジェイエアさんと供給先を探していたところマッチングできまして、総合販売戦略課と企画の方と連携して、そうした取組が、今回、実現したということです。

6月に活ほたてを空輸して店舗まで運んで、試験的に販売をしました。生きているものですから、非常に売上も良いということで、今年は7月15日から17日までの3日間、延べ10店舗程で、空輸して、生きたほたてを販売したということでございます。

今後も活ほたてだけではなくて、嶽きみですとか、航空会社さんとも連携しながら、旬のものを関西圏にお届けできるよう、取り組んで参りたいと思います。

(永木康司氏)

山田さんが、今、お話になった内容と重なるところもあるかと思いますが、何故か、青森県青森市に観光に行きたいという人が一杯いらっしゃいます。関西の皆さんが何故行けないかというところでもうちょっと深掘りしてもらったらいんじゃないかと思います。私の近辺では、行きたい、行きたいという意見が多いです。

そういう需要が一杯あるのに、何故結び付かないのか。私から1つ提案です。

自然とか食とか牧場とか温泉とか花火大会とか、いろいろなことが青森にはあるわけです。ただ、決まった観光ルートじゃなくて、プライベートで訪問したいという需要があります。

そうすると、受け皿として、例えば、9人乗りのバンなんかにはボランティアで地元の人が案内を兼ねて乗るといったやり方はどうでしょうか。そうしますと、観光ルートではなく、地元の人たちが行かれる店、いわば穴場ですよ。そういうところは、非常に興味を持たれると思います。

私自身が、それを実際やってみましたら、びっくりするようなところに連れて行かれました。それが、また、地元の味なんですよ。

そういう点で、是非、プライベートのプランニングも受けますよという相談の窓口がたてられたら、ここは行きたいとなるのではないのでしょうか。例えば、我々が行っても、やっぱり社員が行くところは違いますよね。これは、珍しいんですよ、美味しいんですよって言われたら、「エー」ってなるじゃないですか。

そういうことでやっていただいたら、私は需要が増えてくると思うんです。

それプラス、最近、マナー。ホテルでもお土産屋さんでも、マナーがあまりにもマニュアル化されてしまって、心が通じていない。折角行ってお土産を買った。その時の対応の仕方によっては、興ざめするわけですよ。



先だっても、私、2回興ざめました。

折角来られて買い物してもらって、その対応が、何かこう、お客さんを見ずに機械だけ打って、対応をされるというのが残念です。アルバイトの方も、最近、非常に増えていますが、そのホテルであれ、お土産屋さんであれ、教育が大事だと思います。例えば、物を買う時に両手で持っていたら、もうちょっとこうしたら軽くなんじゃないですかとかいう声をかけてくれるのが、本来の小売の商売だと思うんです。何かちょっと、持ちにくいものは、少しでも持ちやすいように工夫する、また、大抵は紙袋とかあるんですけど、ビニール袋が必要な場合は杓子定規に「3円ください」と言われたりすると、ちょっとがっかりします。

お客さんの方を向いたサービス、対応について、教育していくと、青森に来られた人から、段々話が広がっていいじゃないかなと。ちょっとだけそういうことを考えました。

(知事)

ありがとうございます。

これから戦略的に国内誘客を考えていく必要があると思います。要するに個人旅行とか、そういう状況が増えていきますし、それから、ネットでいろんなことを調べて情報をとって旅行しようとか、そういう方々も多いです。

あと、やっぱりメディアと言うんでしょうか、メディア戦略、どれだけ多く青森県の情報をメディアに流すとか。非常に重要なものですから、その誘客の戦略的なことをどうしているかということ少し話させていただきます。

それと、今、大変、御指摘をいただきました、どうしても、どの仕事、どの商売、あるいはどの役所でもそうですけども、お客様に対する配慮というんでしょうか、ほんのちょっと心遣い、心配りができれば、更にそれがプラスになるということなんです、なかなか人材育成、人材教育、難しい時代になっているんですけども。我々としても、怠ることなく、お客様に対しての受け答え。タクシーでもバスでもそうなんですけども、そういった講座を、実は何回かやっているんですけども、なかなかまだ、改善していないということは受け止めさせていただきます。

そういった点等含めて、観光企画課とか、誘客交流課の方、よろしく願います。

(観光国際戦略局次長)

まず、1つ目なんですけども、先ほど、団体旅行の話を中心にお話したんですが、もう1つは、ご家族とかご友人とかで行く、いわゆる個人旅行と言われているものです。こちらの方は、情報をお伝えするというのが、パンフレットとかもないものですから、会長がお話されたように、直接お客様に青森県の魅力的なところを我々もお伝えしたいところなんです。

現在、今、やれていることというのは、例えば、テレビ番組の旅番組の中で御紹介をすることで知っていただいたり、それから、やはりインターネット、特にSNSですかね、フェイスブックだったり、ブログだったり、ああいったものを通じて御紹介をするのを、まだまだ足りないんですが、現在、精力的にやっております。

ちなみに、昨年度は、何とか1,000件ぐらいの情報を更新しまして、フォロアー、アクセスで3,000万件ぐらいのアクセスまではいっていますが、ただ、やっぱり日本にはもっともっと凄い県が沢山ございます。我々ももっともっと情報をお伝えしていくのが目標、もっと高

いところに持っていきたいなと思ってございます。

そういったことを通じながら、青森県の魅力を少し、もう少し、皆様に知っていただきながら、ご家族の皆さんに喜んでいただけるように努めていきたいと思ってございます。

あともう1つ、マナーについてのお話も頂戴しました。本当に我々ももう何十年もマナーアップ、ホスピタリティ向上という取組を、一生懸命、従業員の教育をしましょう、接遇については、こうしましょうということを機会あるたびにやってきました。

それから、上手くいった地域には、褒めることもずっとやってきたんですが、やはり、人口が、働き手が少なくなってくると、どうしてもそういったこともありまして、今、お話をいただいて、また持ち帰って、精力的に、こういった取組も強化していきたいと思ってございます。ありがとうございます。

(知事)

御指摘、本当にありがとうございます。

(永木康司氏)

一言だけ追加させていただきます。

失礼なことを言うと思うんですけど、お許しください。

ただ今のお話で、私、青森に関係して30年を超えて、こんな立派な県はないです。他が一杯あるって、それは禁句ですよ。青森県は立派です。

(知事)

ありがとうございます、そう言っていただいたお言葉を糧として、しっかりとさらに頑張っていきます。

(高市みゆき氏)



事前の資料を今回いただいた中で、冷凍野菜の産地づくりというのが目につきまして、その産地づくりに関わる取組とか、野菜のニーズとかっていうのをちょっとお伺いできればと思いました。

縄文のお話も、一杯出てきていますが、私、昨年、是川遺跡を訪問しまして、小さい規模だったんですけど、凄く充実していて、大事にされているなというふうに感じました。

(知事)

ありがとうございます。

野菜のこと、聞いていただけて嬉しいです。

というのは、我々も、全国のいろんなところで、イオンさん、ヨーカドーさんを中心とした量販店、あるいは、神戸、大丸さんとかで、南は九州、一番遠いところで、宮古島まで行きましたけど、セールスとかフェアとかやっています。

その中で勉強することが一杯ありまして、昨今、特に出てきたのが、冷凍流通が各段に進歩したので、冷凍野菜が欲しいんだということです。というのも、家庭の事情で、全部チンでやるのはお作りになる方も嫌で、野菜だけでも、ちゃんと冷凍してあれば、それを炒めたりとか、いろんな加工をしたりとか、時短につながる料理をしたいということなんです。

その場面において、どうしても国産野菜が欲しいということで、青森県も、かぼちゃやブロッコリー、アスパラとか、一杯、いろいろやり出しているんです。

相当経費というか、段取りもかけながらやってきていまして、農林水産部長の方から、少し話をさせていただきます。

それから、縄文の関係なんですけども、県内の遺跡群を上手く使いながら、1万年の旅というんでしょうか、縄文1万年の旅という形をできるようにということで工夫をさせていただいています。

そこも、話してもらいたいと思います。

(農林水産部長)

冷凍食品につきましては、昨年度からこの3か年で重点的に取り組んでいます。去年は、ブロッコリー、アスパラガス、メロン、かぼちゃ、この4品目を産地化を図っていく方向性のあるものとして、産業技術センターの工業部門などと連携して、どういう処理をしてやっていけばいいかなど実証をしました。

そうしましたら、見た目、味はいいんだけども、コストをもう少し考えるべきだとか、いろんな意見をいただきました。

それから、1年、ちょっと遅れて、その中からかぼちゃとブロッコリー、これを津軽の方と県南の方の大規模ほ場整備事業で、大規模にやっているようなところで、大量に生産して供給する仕組みまでもっていけないかということで、産地の方とつながった取組を今年からスタートさせているところです。

また、加工事業者さんが、青森県内にある、農産物だけではなくて、水産物や果実ですとか、そういうものも含めて、手当たり次第、とにかくベンチャー的に、どんどん開発しようということで、16事業者に取り組んでいただきました。

そうしましたら、62アイテムが実際に商品化されております。

こうしたものを、今年は大手量販店さんで試験的に知事のトップセールスの機会に売ってみて、また求評をいただいて、その上で作戦を考えて、しっかりこの冷凍食品産業、青森県の産地で獲れたてをきちんと冷凍してフレッシュな状態でお客様に届ける仕組みを作っていきたいと考えてございます。

(知事)

相当気合を入れてやっております。

というのは、元々野菜は自信があります。良い土を持っていますし、作り手が御存知のとおり凝っているというか、俺が一番という人たちが作っているんです。

ただ、これまで冷凍技術というのは、魚はドリップが出るみたいに、どうしても戻すと上手くいかなかったんです。今、お寿司は、そのまま冷凍だったり、うちの貝焼き味噌、ホタテ、あれ

がそのまま冷凍になって解凍することができたりとか。びっくりするぐらい技術が良くなったものですから、良い品物をきちんと冷凍して、きちんと解凍できれば、多く獲れた時とか、いろんなことのリスクも含めて、改善できます。

ということで、今、いろいろやっているんです。また、良い種を作っていたらと思っ
ています。

(高市みゆき氏)

また、どこかで拝見させていただければと思います。

(知事)

そう、最適なかぼちゃとかね。

実は、私共、福地ホワイト6片種のほかに、住友化学さんの巨大なニンニクを高市さんたちが作ってくれて、非常に農家が潤ったわけです。本当に感謝する次第です。

それでも、種が最近足りなくなりまして、我々も自分たちで、「青森福雪」ですとか、真っ白いのを作ったんですけども。いろんなニンニクの種、合う畑でやっ
ていこうと、そういうことで頑張らせていただきます。

では、縄文の話に参ります。

(三内丸山遺跡センター副所長)

縄文遺跡群、県内の取組について、簡単に御紹介いたします。

実は、昨年度までボランティアガイドをする体制が、実は8遺跡の中で全部揃ってはいなかつたんですが、今年になりまして、漸く自治体さんが頑張っていた
きまして、全ての8遺跡でボランティアガイドをする体制が整ったところ
です。

また、その他にガイダンス施設を新たに整備する計画もありまして、それぞれの自治体で頑張
っていただいて、受入体制の充実に努めておりました。

県としましては、そのように頑張っている自治体、主にガイドの養成等、担い手づくりという
ことで、講座等を行うほか、それぞれの自治体を支援しているところでございます。

また、昨年まで、オンラインでそれぞれの遺跡を通じて旅行するような取組も行ったり、それ
ぞれ4道県、あるいは各自治体と連携しながら、世界遺産を盛り上げていきたいなと思っ
ていますので、今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

(高市みゆき氏)

ありがとうございました。

(荒巻万寿夫氏)

本日はお招きいただき、誠にありがとうございます。
選ばれる青森、ここだけ見て一言書かせていただいたわけでございます。

私も入社以来、青森りんご一筋でやってきておりますが、御存知のとおり、ここ10年をみても、特に果物は、収量減の単価高で推移しています。これには、後継者不足、高齢化、その他問題もあるわけでございます。

特に、青森、岩手、秋田、長野、山形、福島等々は、りんごに代わるものがいろいろとあるわけです。シャインマスカット、桃、梨等々。新規就農者は、重たいものではなくて軽いもの。できるだけ単収の上がるものということで、目まぐるしく変わって移行してきているわけでございます。

令和3年産を見ましても、主産県、どこでも春先の度重なる凍霜害ということで、かなり数量が少なかったわけですし、年内から、青森に思わぬ、予想以上の相場が生まれたということです。

今後、ますます青森への依存度は高まる一方であると思われ、りんごは青森へと、これがどんどん広まっていくと確信しています。

本県産の基幹産業、そして、1千億円産業であるりんご産業。いろいろとご融資等をされているというふうに思いますが、大きな団体が、幾つもございますし、また、その団体、いろんな施設等々も古くなっている部分もあります。また、新品種が他県でどんどん出ております。いろんな方面で、今まで以上に更なる御支援のほどお願いしたいと思っております。

(知事)

ありがとうございました。

1千億円産業ということで、踏ん張ってやっております。

昨年が、ちょっと獲れなかったんですが、今年は、44万トンいけますから、思う存分、お互い売れますというか、売らなきゃいけないで大変です。

というわけで海外ルート、台湾、香港も含めて一定量をそちらに向けまして、国内の販売対策も気合を込めてやらせていただきたいと思いますと思っていました。

「つがる」から始まって、「トキ」ですね。この「トキ」でいかに海外も国内もぐっとりんごのムードを高めていくかということと、それに合わせて全国のフェア等も回って歩き、そして、さっきお話した、今年に関西の方は嵐山東小学校、3年間できなかったけれども、ついに授業ができます。

こまめにそういうりんごの授業とかやって歩いていますが、今後、九州や関東も含め、やらせていただきますということで、確実に青森県は、生産者、若手もりんごの方に入ってきてくれておりますし、そういった方々の期待に応えなきゃいけないと思っております。

品種の話も、「ふじ」に代わるというのは、なかなか難しいんですけど、とりあえず10月の「トキ」が踏ん張ってくれているので、それから思いのほか、りんご農家に聞くと「名月」だって言います。

そのようにつなぎながら、「ふじ」に持っていくということで、今年も踏ん張っていきたく



思っていました。農林水産部長も総合販売戦略課長も来ていますから、気合の返事が出ると思います。

(農林水産部長)

まず、去年は、十分な数量を準備できなくて、夏場に雨が降らず、我々が思った以上に玉が伸びなかったということでございます。

また、今年も、先般、8月3日、それから8月9日の豪雨により、一部の河川敷で被害を受けておりました、先ほど知事から44万トンということございましたけれども、数量44万8千トンくらいを見込んでいたうちの約1%から2%程度落ちるのですが、平場では、順調にすくすくと成長しているという状況です。

44万トンを維持していく、こういう目標を我々10年間の目標として掲げていますので、それをまず、しっかりやっていくのですが、一番やっぱり心配しているのが、今までりんご産地を背負ってきた団塊の世代の方々、非常に分厚い層の方々です。この方々が物理的にあと5年くらいで、どんどんリタイヤされていく。田んぼのように、次の年、隣に頼むというふうにはいかならないものですから、その若い方々、今、りんご、お金取れるものですから、帰ってきている若い人に技術と園地をしっかりと継承していく対策と第三者承継も含めて、県として強化してございます。

新規就農者、非農家出身の方が、農家出身の方よりも、最近、多く帰ってくるようになっておりました、そういう方々はやはり3年目くらい、あるいは5年目くらいが、続けていけるかどうかの正念場を迎えることとなります。

そこで、自分りんごで生きていくんだというような人には、県単事業で、今年から2分の1の設備投資を支援するという事業もスタートさせています。

また、先ほどの団塊の世代の方々の分を、面積にすれば、相当の面積を若い方が機械化しながら引き受けていかなければならないため、大胆な投資をするのは今だというふうな意気込みで、まずは知事を説得して、この若い方々のりんごづくり、我々、青森県に帰って来るりんごをやりたい人というのは、本当にりんごに惚れて、技術、りんごの本当の奥深さを極めたいと思っている、プロフェッショナル志向の強い若い方々ですので、それをしっかり行政として、また関係団体も施設整備については、きちんと国の強い農業づくり交付金に知事からポイントを付けていただきまして、全部採択するように工夫をしながら集出荷施設、これも再編しながら取り組んで44万トン、しっかり維持していきたいと思っております。

(知事)

総合販売戦略課で、最近、アバターとかOriHime（オリヒメ）とか、いろいろ面白いことをやっていますから、少し説明してもらいます。

(総合販売戦略課長)

日頃から、青森りんごの会でのPR、御協力いただきましてありがとうございます。

いろいろとりんごの会の御協力をいただきながら、店頭での宣伝ですとかプレゼントキャンペーン、それからヨーグルトメーカー等と組みましたタイアップキャンペーンなど、消費者の

方々により多く手に取っていただけるように工夫してPRしているところです。

また、県が行います青森県フェアにおきましても、今、知事からもありましたとおり、コロナ禍の中で工夫しながら非接触でのPRはできないかということで、アバターを使ったり、ロボットを使ったり、県職員ですとか、ミスりんごが青森にいながら、お客様に売場でPRできるような仕組みですとか、売場で試食販売ができないものですから、個別に包装したカットりんごをお客様にお配りして、お家で食べていただいて、次の日に、また美味しかったら買いに来ていただく。そういった取組もしてございます。

引き続き、りんごの会の皆様の御協力を得ながら、PR、頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞ御協力のほど、よろしくお願いいたします。

(知事)

アバター、面白いです。私がやっても、ミスりんごになったりと、変化できます。一定の年齢の方がやっても女子高生みたいに可愛い感じでこうやって、専門知識がないとできないですけど。いろんな方法があるんだなと思いました。

そういうわけで工夫していろいろとやらさせていただいております。

44万トン、去年に比べて5万トンぐらい多くなるものですから、本当に真剣に売って歩かなきゃという、一定の単価で売っていかなくちゃということで、力を貸してください。よろしくお願いいたします。

(向瀬正人氏)



よろしくお願いいたします。

その前にまず、8月3日からの記録的な大雨で被災された方々、沢山いらっしゃいます。心よりお見舞いを申し上げます。

私は、A! Premiumについて、御質問をしたいと思っております。

大変素晴らしい仕組み、仕組みであるというふう

に思います。しかし、この方法では、数量がまず限られてくること、コストがかかり過ぎるといったことがあり、高売価商材にはまってしまうかと思いますが、私共の仕事がら、大量に大衆に消費される、これらの品物についても、同じように一日で早く、1分でも早く着いて欲しいという気持ちがございます。

これらについては、どんなふう企画されているのかお教えいただきたいなと思っております。

(知事)

まず、A! Premiumという仕組みなんですけども、当初、ヤマトさんとそれから全日空のエアカーゴがあった、今はもう無くなりましたが。仙台まで持っていけば、次の日の午前中に日本の9割の地域にまで届けられます。

我々の悩みは、魚介類のような生ものです。魚介類とか、あるいは田舎館の完熟したイチゴとか、桃なんかも特にそうなんですけども、完全に美味しくなったものを運ぶことによって単価が

よいものを運べるわけです。

それまでは、大阪だったら2日とか3日ぐらい経ってしまってから、ホタテが死んでいるとか、イカもヒラメも死んでいるというような形でできていたものが、本当に生きたまま届けられる。当日、獲ったものが次の日の午前中、要するにランチにも使えるという仕組みを、うちの県土整備部が提案してきました。

というのは、農林水産部は、稼ぎまくっているじゃないですか。売ったり買ったり、セールスしたりとか頑張って稼いでくれています。県土整備部は、漁港を造ったりで、とつても金ばっかり使って、少し稼ぐ算段してくれて言ったら、「いや、あります」って言って、提案してきたのが、このA! Premiumなんです。

これが一番向いたのは香港でした。実は、沖縄に23時ぐらいまでに持っていくと、2時ぐらいの飛行機で香港とかシンガポール、マレーシアに向かうんですが、特に香港は早く届けることができまして、次の日に、パクパク生きているホタテとか、小川原湖のガニが届く、そういう仕組みでございました。

今回のこのコロナで、全日空の沖縄ハブが潰れてしまって、エアカーゴそのものも無くなったんです。しかしながら、お互い工夫して、今度は羽田を使ったJALで海外に出そうということを考え、もう出来上がりました。

それで、香港はまた、再スタートしています。

というのが、A! Premiumの仕組みなんです。

うちは、県土整備部も営業というか商売をしてくれて、大阪に県土整備部の職員がいて、営業をかけて歩いているんですよ。

香港に一切出せなくなった時に県土整備部は、名古屋に行って売ってくると言って、香港に向けていた魚介類を全て、殆ど名古屋に持って行って、力を入れてやってくれていました。本当に職員に感謝しています。

今後も、このA! Premiumは、遠いところ、九州とか沖縄とか、香港とか、海外向けには非常に羽田から出す、青森空港から羽田へ持って行って出すというパターンで復活させましたし、段取りしていけると思っています。大ロットのロジをどうしていくかとか、どういうふうに販売していくかとか、その辺、話をさせます。

(農林水産部長)

青森県の扱い量からすれば、得意のりんごであれ、ながいもであれ、ごぼうであれ、にんにくであれ、棚持ちをする貯蔵が比較的効く、大量消費のお米も含めて、それが実際は産出額としては、非常に大きい部分でございます。

ただ、りんご1つとってみても、やはり青森県は、古くからCA貯蔵ですとか、きちんと通年で出荷できる集出荷体制を整えてきていると。

それから、今、スマートフレッシュという薬剤がございますけれども、それと組み合わせ、より新鮮な状態を保つ技術も併せながらやっています。

今回、この会議、市場の関係者が4名も参加していただいている状況でございますが、ただ、私、勉強してきた限りでは、まだまだ西日本、近畿圏にはもっと努力して売り込んで、取扱量も増やしていただかなければならないなという気持ちです。

A! Premiumの話でも、香港などで青森県の農林水産物が評価を受ける、注目を集める。そういう効果というのは、我々の想像以上でして、国内で一生懸命にセールスしても、なかなか評価されないものが、海外で評価されたらメディアに広がった瞬間、今まであまり見てくれなかった方々もいきなり見てくれる、そういう戦略的な販売の方法のツールといたしますか、手法の1つにもなり得ると考えてございます。

先ほど、KOHYOさんの活活たての話もございましたけれども、そういうものが、青森県のは鮮度がいいですか、非常に斬新な販売方法をやっているとか、そういうことが広まれば、我々の強みの大量のものの評価をおのずとけん引してくれるんじゃないかと、青天の霹靂、米でいえば、そういう役割を果たしてもらっていますけれども。そういう戦略を持ちながら、販売をしていきたいと思っております。

(知事)

是非、市場の皆様方と運輸業界とが、最も良い方法が何なのか、IoT活用してどういうふう
に運ぶとか、進めていければなど、本当に思っています。

ひょっとすれば、トラックで20時間かけて持っていくとかのパターンでなくて、コンテナの、
いろんな大きめコンテナの、船がつけ替え、つけ替えて、コンテナ運ぶみたいに、そういうパター
ンだとか、何か変わっていくじゃないかと、自分としては期待しているんですよ。

本当にロジ革命というか、物流の新しいあり方を問うておかないと、人が無い、運べないとい
うことのないようにしなければなど、遠い産地として、遠い我々とすれば、感じています。

(農林水産部長)

国としても、物流改革の検討を進めてございまして、コロナ前ですが、日本から3人の知事が
委員として選ばれてまして、三村知事もA! Premiumの取組を報告し、国でも中間取りまと
めをしています。まだまだ課題は多いという感触でございます。

(知事)

運べないと売れないものですから、非常に大きなものです。

薬物だと辛いものですから、これからも大きなテーマになると思っております。

今日、御提言いただきありがとうございます。

(細田雅人氏)

これまでも、いろんな発言をさせていただいていますが、今回は、この縄文人、ヤポネシア人って言うんですけ
ども、そのヤポネシアゲノムのプロジェクトが、文科省の
新学術領域研究として採択されているという話を、実は、
送らせていただいています。

これの元々の考え方は、青森県の食とか観光ということにも連動するんですけども。いわゆる青森に観光で行
けばリピーターが増える。一度来ただけじゃなくて、何度



も何度も行きたくなる、四季折々に行きたくなる。あるいは、人口減も何らかの形でどこかで歯止めがかかって、青森県に定住したい、移住したいという人たちが増えるかどうかというのも、おそらく、この1つのポイントとしては、このヤポネシアという話が、どこかで効いてくると思っています。

それは、昔の時代と違って、次世代型のシークエンサーがあって、いろいろなものが見つかるいろいろなことが分かってきます。それを文科省が取り上げているということで、それをきちんと県庁としてキャッチアップして、上手く活かしていただきたいと思って書かせていただきました。

そのことが、結果として、北海道、それから北東北の縄文遺跡群の、多分、今までとは違うパラダイムの価値を生む、それが食とか観光にもどこかでリンクしてくる、そういうことを期待していきたいと思います。

(知事)

非常にダイナミズムというか、大きな観点から見ていると、ヨーロッパも含めてですけど、西から東にいろんな人たちが、移ってきているということと、我々も改めて学ばせていただかなきゃいけないと思っていました。

いかにして観光の、特にインバウンドは、自分で言うのはなんですけども、東日本大震災の後激減したものを、そこから6倍に伸ばして、コロナ禍で見事に、ほぼゼロになったんですね。このショックたるや凄くて、それをいかにして蘇らせるかということで、観光国際戦略局がやっておりますし、エアの方もあります。少し話させていただきます。

(観光国際戦略局次長)

細田様、ありがとうございます。

まず、今の縄文でございますが、現在、インバウンドのお客様の動きとして、やはり、SDGs、持続可能性というものに対して、お客様、特に欧米系のお客様なんですけど、非常に関心を示してくださっています。

例えば、ホテルの中でSDGsに取り組んでいるホテルと、あまり取り組んでいないホテルでしたら、取り組んでいるホテルに泊まりたいと思ったださっている方々が多くいらっしゃる。

それから、あと、もう1つ、地域に貢献したいというふうな旅人が思ったださってまして、我々、こういったインバウンドのお客様の志向を考えていけば、この縄文遺跡群というものには、非常にインバウンドと相性が良い、また、お伝えしていかなければいけないものではないかと思ったださってまして、現在、こういったインバウンドに対する情報につきましては、特に縄文遺跡群の、ただ、縄文遺跡群があるという情報だけではなくて、そこにあった、持続を可能にしてきた社会みたいなものも少しお伝えしながら、誘客の方、現在、取り組んでございます。

まだまだ、こういったヤポネシア人のお話とか、まだ不勉強ですが、そういった情報もどんどんエビデンス等出てくれば、それもまたいただいて、お伝えしながら、価値を共有していきながら、お客様の誘客にまた取り組んでいきたいと思っております。ありがとうございます。

(企画政策部長)

私から、インバウンドの国際線の関係について補足させていただきます。

ようやく、今年の6月ぐらいから、海外から、団体旅行中心に、入れておりますが、この前、航空会社の人と話をしたら、やはり入国前のPCR検査が必要だとか、団体は、ガイドがついていないと駄目だとか、ということで、なかなか、関西も福岡も一般の旅行の活性化というのが思うように進んでいないと。ただ、国では、日本人が海外に行って戻ってきた時のPCR検査を簡素化する、無くすという方向になっているのと、1日当たりの上限も少し緩和する方向だと聞いていますし、また、団体旅行に加え、個人旅行もやがて解禁になると、こういった動きが出てきております。

青森空港は、元々、大韓航空とエバー航空、更には中国の航空会社が就航する予定でいましたが、コロナで一旦それが中断しておりますが、今年のできれば12月、来年の1月ぐらいに、まずチャーターで再開いたしまして、いよいよ2023年、来年のサマースケジュール、もしくはウィンタースケジュールにも青森空港にも定期便を戻していきたいというふうに、今、考えております。

本県の場合、地理的な面でも、人類学的な面でも、やはり近隣の韓国、中国、香港、台湾、こういったところとも交流をやっぱり活性化していくということが非常に大きな、経済的にも観光的にも大事だと思っておりますので、コロナの状況次第なんですけど、1つ1つクリアしながら、国際線の再開を目指していきたいと考えております。

(司会)

ありがとうございました。

御案内の時刻まで、あと1、2分程度となりましたが、折角の機会ですので、応援隊の皆様がよろしければ10分程度延長させていただきまして、これまで発言されていない方から、一言、二言と思っておりますが。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

(津曲孝氏)

しばらくでございます。

私の息子は、跡取りなのに青森の奥入瀬のお嬢さんと結婚して、今、青森で頑張っております。

向こうで、現実にハートのチェリー、生産者と組んでやるネット販売の戦略とソフトを組み立ててPRもやっております。息子が1週間か2週間前にトマトを送ってきて、食べた瞬間に美味しかったものだから、息子に「おっ、これはつまみのトマトだな」と。「つまみ」、「旨みつまみトマト」って名前を付けたらどうだとか。アイデアがあります。

あまりにも青森は良いものがありすぎて、先ほど、おっしゃっていましたが、素晴らしい県ですね。水はトップクラスで分かるし、多分、国外の方が分かっているんじゃないですか。やっぱり素晴らしい県ですし、知事も素晴らしいんですけど。戦略的に水、森、白神山地から八



甲田、全てにおいて、下北からの陸奥湾の魚介類。これは、どれをとっても、米でも美味しく作れるように、自然がなっている。動植物が皆、素晴らしい。それは、日本がこれから、特に大事にせにゃいかん。食料自給率っていうんですか、持続可能とか何か言われている。難しいことは言わんと、この自給率が青森県はナンバーワンじゃないかと思えます。そして、やはり魅力ある、私は今でも、魅力を特に感じているのは、息子から直接聞くと、優秀な若手農業者の彼らがどんどん伸びて、あと10年、20年経ったら、とんでもない県になりますよ。ですから、そこに、また県土整備の連中が流通まで考えているんですよ。果物は何とかなることだけど、あの下北カレーじゃないけども、生ものでも届ける、香港からシンガポール、それを見た時、最近、日本が、首相が、皆が目指す本質を全部青森が持っています。

本当に魅力ある青森です。ありがとうございます。

(知事)

本当にありがとうございます。

大変お褒めいただきましたが、何か決意を言ってもいいんじゃないですか、農林水産部長として。

(農林水産部長)

津曲さん、ありがとうございます。

うちの知事が始めた「若手農業トップランナー塾」という塾がございまして、我々が育ててきた若手を息子さんに面倒をみていただいて、非常に今、良い関係で三八地域が、若い人たちが盛り上がってきております。

食料自給率は、食料自給力というものから考えた時に青森県は貢献率が非常に高い。令和3年度農業白書では、生産農業所得が2倍に伸びたというコラムが紹介されました。

これ、3,200億円くらいの産出額で、手取りがその半分だとした時に1,500億円くらいが農家の手元に残っている計算になって、他県さんは、米を除いてみた時に皆、落ち込んでいますけれども、青森県だけ何故か産出額、生産農業所得が伸びているということを国の方々も気が付いて、農業白書で攻めの農林水産業をやっているらしいと。国よりも10年、先んじて攻めの農林水産業というものを打ち出してやってきたことの結果が、今につながっているのではないかなと。私どもとしては、農林水産部頑張れと、自分が売るから、おまえたち頑張れと、いつも知事から褒めていただいて、乗せていただいて頑張っています。

これからも一次産業県として、きちんと、今、食料安全保障が見直されている時こそ、我々の、真価が問われていくんだろうとっておりますので、また、良い成果を是非出していきたいと思っています。

(知事)

しっかりとやりたいと思っていました。

この前、社長からも言われたんですけど、水、要するにいかに良い水を山から、栄養分を得た水を出していけるか。水路の1万1千キロ、直したんですよ、ちゃんと。

物凄い地味なことなんですけども、農林水産部が理解してくれて、山の木の植え替えから、水

路から、ということでやっております。

水を守りきれれば、うちの農林水産業の基本は守れると思っています。あと、人を育ててくれています。

本当にありがとうございます。

実は、昨今、我々青森県、神戸と組んで、神戸市の市長が青森の課長をやっていたものですから、非常に仲良くなって、神戸戦略をどんどん進めていまして、その間に入ってくれたのが、藤岡君。サンテレビで、いろいろと青森のことばかり褒めてくれているんですけど、何かこの際、激励でもいいし、質疑応答でもいいし、折角来てくれたから、生番組から来てくれてありがとう。

今日も実は、神戸、朝からサンテレビに行って、市長のところに行って、商議所行ってきました。

(藤岡勇貴氏)



今日は、サンテレビに来社いただきまして、どうもありがとうございます。

サンテレビも青森のPRの番組を2年前から放送させていただいております。

今日、知事に私は直接、私が書いた紙を渡させていただきました。今、その番組関連で、うちの営業、あるいはカメラマンであったりスタッフが、青森に行く機会があるんですね。そこで、その兵庫県民が、何が心を掴むか。これ、データではないんですけども、私の肌感覚というところで、2つ挙げさせていただきました。

まず、兵庫県と青森県、日本の中で太平洋と日本海、2つに面しているところは、北海道を除いて兵庫と青森だけなんです。そこに陸奥湾があって、兵庫には瀬戸内海があると。非常に共通点があるんですね。兵庫にあるもの、ないもので話をさせていただいて。

まず、兵庫にないもの、魚はあるんですけども、魚の種類が違います。兵庫は明石のタイ、鳴門のタイであったり、明石のタコであったり、イカナゴであったり、カニ、ホタルイカ、カキ、カニもあります。

でも、青森は、種類がまたちょっと違うんですね。大間のマグロがあり、陸奥湾のホタテがあり、ホッキガイがあったり、八戸前沖サバがあったりと。様々な海産物があります。

私は淡路島出身で、子どものころから美味しい魚を一杯食べてきました。でも、青森には負けません。それくらいやっぱり美味しいものがありまして、私はここに書いたのは、他県もうらやむ、妬むような宝石を抱えているというふうに私は書いたんですね。

この、やっぱり海鮮もどんどん前面に出してPRしていくべきだと、私は思うんです。やっぱり営業マン、そしてうちのスタッフが「美味しい」と言ったのは、まず海鮮なんですね。ここを目玉に売っていくことで、きっと関西の心に、皆さんの心に響くと思うんですね。北海道にも負けません。北海道に勝っているものも、きっと一杯あると思います。

(知事)

お酒も勝っていると自負しています。

(藤岡氏)

そうなんです。

兵庫にあるものといえば、やはり日本酒なんですね。兵庫は灘五郷があります。日本酒文化なんですけども。その兵庫にいる営業マンが唸った田酒、やっぱりこの日本酒があるわけですよね、豊盃であったり、陸奥八仙と。一杯あるので、この海鮮と日本酒、ツートップでどんどん売り出せば、また、観光客もどんどん神戸から青森に行っていただけのではないかなと思っております。

(知事)

ありがとうございます。

農林水産部から一言。

(農林水産部総合販売戦略課長)

昨年から、日本酒と色々な県産品の何が合うかというのを、ペアリング、いろいろと組み合わせせて情報発信しています。このお酒には、こんなものもいいみたいな、ホームページにも載せておりましたので、後ほどご覧いただきたいと思います。

いろんな面白い食べ方といいますか、組み合わせが出て参りますので、また、そういった情報発信をしながら頑張っていきたいと思いますので、引き続き応援のほど、よろしく願いいたします。

(知事)

では、企画政策部長から、ここはビシッと答えて。

(企画政策部長)

大変難しい宿題をもらいました。

2年ぶりの、ここで開催、様々な御意見を頂戴し、私共、回答してきました。

改めて思ったのが、知事が就任して20年になりますけども、やはり、これまで、ここにいらっしやる皆様も含めて、人と人との繋がりをきちんと繋いできたことが、今日の会議に繋がっているんだということを改めて認識したところでございます。

まだまだ課題は山積しておりまして、1つ1つ解決していかないといけないんですが、やはり定期的にこういう形でお会いしまして、直接、叱咤激励いただくことが我々県庁職員の向上にも繋がると思いますので、引き続き、いろんな御意見を頂戴していただければと思います。どうぞ引き続きよろしくお願いいたします。

ビシッとはいかなかったんですが、私の想いでございます。ありがとうございました。

(知事)

今日、激励をいただきまして、最初に永井会長から、いつもお叱りをいただいているんですけど、激励をいただきました。

うちの企画政策部長から叱咤激励というお話があったんですけども、我々、県庁職員、やっぱ

り一番思っていることは、シンプルに青森を良くしたい。青森で皆、暮らして欲しい、選んで欲しい。一旦出て行ったりとか、勉強しに行っていた方々も戻って来て欲しい。いろんな方々から青森っていいねって。旅行でもいいし、買い物でもいいんですけども、生きる場所として良いところだねって言われたいなと、本気でそう思って仕事をしています。

その場面におきましては、こうして応援隊の皆様方から、実際、率直な言葉、この大阪圏でもそうですし、先般、名古屋でも東京でもやったんですけども、率直なお言葉をいただくというのが凄い大事でございまして、あるいは、今日のように、何か褒められると、やっぱり嬉しくなっちゃって、もっと頑張ろうという気持ちになるわけでございます。

御多忙のところ、そして、コロナのこういう状況でございますが、リアルでお互いに意見交換ができた、何よりも、お会いできたことを、私は最大の喜びとしたいと思いますし、また、まさに叱咤激励というか、いろんなアイデアをいただきましたこと、そのことを、私、しっかりと受け止めて活かしていきたいと思っております。

繰り返しとなりますが、御多忙のところ、こうして御参集いただき、意見交換できたことを大変な喜びとして、私、締め御挨拶とさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。

お世話になりました。

(司会)

これをもちまして、大阪圏での元気あおもり応援隊会議を終了とさせていただきます。

本日は、青森県に対して、沢山のエールをいただきまして、本当にありがとうございました。